

2022年8月1日

2022年6月 Nr. 496

今回は、ヘルミッツハイム (Hellmitzheim) というバイエルン州の村が話題になっています。

バイエルン王国は、1918年に共和国に、1949年に連邦を構成する州にそれぞれなりました。ドイツ全土において、ますます多くの若者たちが村から都市へと移動しています。その結果、まるで多くの村々が徐々に死に絶えつつあるかのようです。開業医の診療所が閉鎖され、店が廃業し、中央広場では見かける人々がますます少なくなっています。これはバイエルン州においては、北東部の次の3つの行政区において顕著に表れています。すなわち、それらはオーバーフランケン (Oberfranken)、オーバープファルツ (die Oberpfalz)、それにニーダーバイエルン (Niederbayern) です。

しかしながら、北東部ではないウンターフランケン (Unterfranken) においても田舎の生活の質のためにはもっと多くの事をする必要があります。その際とりわけ重要なのは住民が自発的に積極的になることです。彼らが刺激されるのは競争を通じてです。旅行者にとって大抵の村は魅力に乏しいですが、そこに生活をしている多くの人たちにとっては、彼らの村が美しくなれば、素晴らしいです。このためにヘルミッツハイムという村では1988年に一つの協会・団体も設立されました。というのは、そこには、誰もがもはや住みたいと思わないため、取り壊されるはずだった古い農家の家屋が1軒あったからでした。その協会・団体は歴史上重要な一軒の農家の家屋を保存するために尽力しました。

1990年、その村が1972年以来属している都市は、その家屋の所有者から木骨家屋を購入し、1991年からその協会・団体のメンバーらが家屋の改修のために多くのことを行いました。住居用建物に繋がっている畜舎は、他の教会・団体のためのイベント用の部屋になりました。1階部分全体とかつての牛舎はグループにより確保されます。そこではボランティアの消防隊が火事について知らなければならないことを学びます。そこではトロンボーンの楽隊が練習をしたり、新しい農機具を協同で購入した農民たちが集まり、誰がいつ、順番でその高価な複数の農機具を使うかについて決めたりしなければなりません。

1988年5月のオープン以来、16世紀からのものだった、改修された黄色い木骨家屋は今や、その村の市民の家となっています。しかしながら、2,3年来、多くの人々 Flatterhaus (「ぱたぱた屋敷」) のことについても話題にします。なぜならば2階部分が2016年以来

コウモリ博物館となっているからです。コウモリは鳥のように飛ぶのではなく、ぱたぱたさせながら飛んでいくので、それらは Flattermänner とも呼ばれています。しかしながら、インターネットで Flatterhaus について調べる人は、この市民の家を見つけるだけです。その運営はボランティアの 40 名ほどの協会・団体のメンバーらによって行われています。その内の 7 人が役員会を構成し、1 名がトップを務めています。

90 年代初めに、村全体を再開発することをスタートしました。給水や下水用設備が新しいものに取り替えられ、インターネット接続が改善されました。このことは多くの人にとって、村全体が調和の取れた外観を呈するようにするために自分自身の家をしつらえる良い機会でした。しかしながら、2019 年になっても依然として改修しえなかった複数の家屋がありました。しかしながら、所有者たちにそうするようせき立てることは望みませんでした。そこには全く美しくは見えない一軒の家があります。その家の所有者は本来やらなければならないような家の面倒を見るのが健康上の理由でできない状態にあります。かといってその所有者は家を売却しようと考えていいません。しかしながら、その村を担当している市区係官は、そのような市民に対しても理解を示さなければならないという意見です。

この村においては 11 軒の農家の家屋敷があります。それらは家族経営で、その所有者は農業経営で生計を立てていますが、副業は持っていません。多くの建物は現在、以前とは異なる使われ方をしています。昔 村の協同冷凍装置があった場所に、現在消防署があります。そして以前の狩猟小屋にはアフガニスタンからの 6 人家族の難民が住んでいます。羊用のある納屋からはスポーツ施設が生まれました。また倉庫には今やギャラリーがあります。

子供達のためにも多くのことが成されました。教会のすぐ横には幼稚園があります。市民の家には少年少女合唱団や青少年団も集まります。また、夏には屋外プール施設もあります。もっともそこでは広く泳ぎ回る事はできません。このプールは子供向け専用です。これは若者たちが毎夏、草地に設営します。周囲は角形のわらの柵でできています。プールはプラスチックフィルムで内張りがなされ、消防隊により水で満たされます・・・。

さて、今回話題になっている「村の消滅」ですが、これに関連し日本においても「限界自治体」「限界集落」という言葉があることを思い出しました。この言葉は日本では比較的新しく、社会学者の大野教授（高知大学人文学部）が 1991 年に最初に提唱した概念です。Wikipedia によれば、「限界自治体とは人口の 50%以上が 65 歳以上で、農業用水や森林、道路の維持管理、冠婚葬祭などの共同生活を維持することが限界に近づきつつある自治体のことであり、この定義を集落単位に細分化したものが限界集落」とされています。こ

の言葉は少子高齢化や過疎化に伴い日本の各地において自治体の運営が困難になっていくことを説明する際にしばしば使われています。ドイツにおいて限界自治体や限界集落という言葉が存在するかどうか分かりませんが、現象としては「消滅しつつある自治体」と共通しているように感じます。

今回の課題および放送に登場するヘルミッツハイム (Hellmitzheim) は、Beiheftによれば、人口は、わずか 378 人 (2019 年 7 月放送時点) です。人口における年齢構成や 1 世帯あたりの家族構成員数については言及されていませんが、そもそもこれくらい小さな村が今後も持続可能なのかどうか気になります。しかしながら、この村は前回 (2019 年) の第 26 回連邦食糧・経済省主催の „Unser Dorf hat Zukunft“ というコンテストにおいて州レベルでは金賞を、連邦レベルでは銀賞をそれぞれ受賞しました。連邦レベルにおいては金賞から銅賞まで合計で 30 の村しか受賞していないとのことですから、ヘルミッツハイムがその中の銀賞を受賞したことは大変名誉なことだと思います。また 2020 年 5 月の授賞式は、ベルリンの大統領府で開催され、当時の担当大臣であるクレックナー氏 (Frau Klöckner) だけでなく、シュタインマイヤー大統領が出席し祝辞を述べたようです。尚、3 年に一度開催されるこのコンテストは、コロナの影響で 2022 年に開催が予定されていたものが 2023 年に延期されたようです。このようなコンテストを定期的に行うことが村の活性化のためのモチベーションとなっているとすれば、とてもいいことだと思います。気に掛かることと言えば、受賞後はコンテストへの参加という目標が無くなりますので、果たして従来と同様の熱心さをもって村民の皆さんが活動に参加するののかどうかとか、村民の皆さんの活動自体がマンネリに陥ったりしないかということがあるのではないかと思います。

ところで、以前ゲーテの講座で遠隔暖房 (Fernwärme) が話題になったとき、ドイツ全土では約 12,000 の自治体が存在し、そのうち 3,000 が遠隔暖房を利用しているということを知りました。その利用自治体の多さに驚きましたが、私は同時にドイツ全体の自治体の数の多さにも大変驚いたことを思い出しました (なぜならば、国土面積ではほぼ同じ位ですが人口ではドイツを上回る日本ではそれほど多くの自治体はないとおぼろげながら記憶していたからです)。改めて調べてみたところ、日本でもかつては、例えば、戦後間もない頃は 1 万以上あった自治体の数も 1991 年には既に 3,000 位に減っていましたが、更に平成の大合併により減り、2022 年 4 月末時点では 1,724 になったということが判明しました。ドイツの自治体の数がそれほど多いということは、日本と比べるとより小規模の自治体が多いということでしょうか。今回登場するヘルミッツハイムも約 12,000 の自治体の内の一つであることを考えれば、多少極端な事例だとしてもこれに納得がいきます。

K. K.

2022年8月31日

2022年7月 Nr. 497

今回は「老い」について取り上げられています。ほぼ同世代（57歳～62歳）の4人の作家、ジャーナリスト、精神療法士たちが「老い」について議論します。

南西ドイツ放送（der Südwestrundfunk）において、ヘヒトさん（Herr Hecht）は、それぞれ58歳と61歳の二人の女性作家および58歳の精神療法医と「老い」について話し合いました。ウンフェアツァークトさん（Frau Unverzagt）は既に「老い」について「60歳は新たな40歳」（„60 ist das neue 40“）というタイトルの本も書いています。その本は2020年に発売されました。作家として自分自身を„Lotte Kühn“というペンネームを使っています。多くの女性は60歳になっても、以前の40歳のようなものです、と彼女は書きます。放送では60歳前後の女性だけでなく、男性も問題にしています。そこではウンフェアツァークトさんは、現在自分自身が身を置くもの、それがベストな年齢であるという前提から常に出発すべきであるといっています。

ウンフェアツァークトさんは、決して「老い・年齢」と戦うべきではなく、他人が人に対してこの年齢において期待したり、しばしば求めたりもすることに対して抗うことにより、自由行動の余地を手に入れるべきであるという見解です。例えば、40歳になると、より満ち足りていたり、幸せを感じたりするという人もいます。ウンフェアツァークトさんはそうは思いません。当然誰もが自分の「年齢・老い」を感じます。60歳になれば若者よりゆっくり歩きますし、よく眠れなくなります。しかしながら、それは彼女にとっては全く決定的なことではありません。彼女にとってより重要なのは、他の人との関係です。その関係がもはや以前ほどは強くないことが彼女の目を引きまします。大抵は適正な距離をとったままです。しかしながら、他人との以前のような関係性の強さと別れを告げることは彼女には辛いことです。

ウンフェアツァークトさんは高齢においても、新たに獲得した自由を満喫しています。彼女の4人の子供は家を出ています。今や自分の望むことをやったり、やらなかったりすることができます。彼女はずっと以前からちょっと北極へ行ってみようと考えていました。そのような願望を今やかなえることができます。そのためにやらなければならない第一歩は、この年齢になったら人はどのように行動すべきかということについて他の人が意見を述べることに耳を傾けないことです。今や全く新しいことをもう一度行う、つまりもう一度強くアクセルを踏むという考えを彼女は「拡大・拡張」（Expansion）と呼んでいます。

しかしながら、既にそこにいるにもかかわらず、もう一度自身を発見しなければならないという意見がある場合、行き過ぎです。しかしながら、その「拡大・拡張」の他に、とにかくソファーに倒れ込み、もはや何も面倒を見ず、皆に自分を放っておいてくれるようお願いするという考えが常にあります。

シュピッツァーさん(Herr Spitzer)は50代の終わりです。精神療法士として毎日毎日、人生の様々な状況・場面から生じる不確実・不安なこと、例えば、老いることからくる不安にも向き合っています。朝起きて、一杯のコーヒーを入れ、窓から外を眺め、コンピューターを立ち上げるとき、シュピッツァーさんはこの瞬間には老いを感じることはありません。しかしながら、人は年齢を重ねれば重ねるほど、頻繁にいかに関心が高まるかということに向き合うこととなります。それは診察してもらった医師が切っ掛けになるだけではありません。もはや目が余り良くなって、より強い眼鏡が必要になるときもそうです。それに仕事で殆ど座りっぱなしで働いていますと、腰に問題を抱えることがあります。これは病気というわけではありません。シュピッツァーさんはこれは消耗の兆候だとみています。

58歳でシュピッツァーさんは困惑・いらだちという人生の段階のようなものを経験しています。職業生活においてはまだフルに活動的ですが、家庭に関する関係からは既に部分的には解放されています。この生活領域に関しては、ひょっとするとシュピッツァーさんは既に老人に属すかもしれません。そこでは一種の非同時性のようなものを感じます。

子供のころシュピッツァーさんは、多くの人たちがすでに55歳で年金生活者になるという経験をしました。ルール地方で育ったシュピッツァーさんは、両親の世代では当時、殆どすべての男性たちが炭鉱業で働いていました。そうしてもはやそれほど多くの炭鉱労働者が必要でなくなったとき、多くの方は仕事を辞めるという会社の提案を受け入れました。なぜならば、そうすれば既に55歳で割り増し年金を受給できたからでした。

こうして当時、炭鉱業における失業が回避されることになりました。これらの若き年金生活者の多くは、安楽な生活を送りました。冬には多くの方が2,3週間カナリア諸島で過ごし、夏のためには多くの方は自然を満喫するためにどこかに留め置くキャンピングカーを購入しました。しかしながら、もう55歳で年金生活者として生きることは、シュピッツァーさんなら全く望まなかったでしょう……。

さて、シュピッツァーさんは1960年代後半に多くの炭鉱労働者が55歳でリタイアしたことに触れる中で、自分ならリタイアは選択しなかつたらろうという感想を述べています。確かに現在であれば、55歳でのリタイアは早すぎますので、中々考えにくいと思

ます。しかしながら、当時のことを振り返って見ますと、例えば、当時の平均寿命は 68 歳に満たなかったようですので、現在の平均寿命より 10 歳以上の差があります。そうすると、当時の 55 歳でのリタイアは、現在であれば 65 歳位でのリタイアとほぼ同じような気がしますので、決して不自然ではないと思います。従いまして、現在のシュピツァーさんではなく、当時のシュピツァーさんであれば、55 歳の炭鉱労働者と同様、割り増し年金を受給できる年金生活者の選択をしたのではないかと思います。

ところで、超高齢化社会を迎えている日本においては、「老い」に関する書籍は「病気」に関する本と並び非常に多く出版されていると感じます。ドイツでの「老い」に関する書籍の出版状況はどのようなのでしょうか。日本と同様多いのでしょうか。それとも日本とは異なり少ないのでしょうか。その「老い」に関する本についてですが、私自身の年齢から来るのでしょうか、私も興味がありますし、実際に数冊は読んだことがあります。なるほどと思う部分と本当にそうだろうかと疑問を持つ部分がありますが、啓発されたり、自分が知らないことを本を通じて知ることができたりするのは有益だと感じます。また書籍の場合、著作者が明示されており、責任の所在が明確ですので、ある程度信頼して読める印象があります。一方で、現代ではインターネットでも検索すれば、いろいろな情報が瞬時に簡単に調べられますので、「老い」に関する情報でも同様です。しかしながら、インターネット情報は玉石混交であり、出典に注意する必要があるとも指摘されております。私自身も経験上全くその通りだと思いますので、インターネット情報に対しては注意するよう心掛けているつもりです。

K. K.

2022年9月29日

2022年8月 Nr. 498

今回は「香り」と「臭い」が話題になっています。

人は香りや臭いを嗅ぎます。何かが香るという場合、人が臭いを「感じている」ものほどは強くは臭っていません。不快な臭いもまた存在するのに対して、香りは快いと感じられます。ある臭いが人に非常に不快に感じられる場合、悪臭（Gestank）であると言いますし、それは stinken（悪臭がする）という言葉を使って言い表します。食事をするときには大抵、料理がどのように臭うか嗅ぎます。その後ようやくその料理がどのような味をするのかを味わいます。コロナウイルスは多くの人から一時的に、臭いを嗅いだり、味を感じたりする能力を奪います。

しかしながら、この流行病がないとしても人口の5%の人は全く臭いを感じる事ができませんし、20%は嗅覚に問題を抱えています。これらの人々にとってはこのことはとても不快なことです。なぜならば、臭いは、人間が状況や他の人間にどのように反応するかに大きな影響を与えているからです。しかしながら、臭いを嗅いだり、味を感じたりできなくても食べることをエンジョイできます。なぜならば、口内で Feinwahrnehmung が発達し、食べるものの組織・テクスチャーを楽しむことができるからです。

臭いが全く分らない人の生活は、危険と隣り合わせです。なぜならば、オーブンでパンが燃えたり、どこか近くで火が出たりしても、これが臭いで分らないからです。特定の危険物質が臭いで分らないか、またはその臭いの程度が非常に強くなって初めてその臭いで分る人は、常にある程度の不安を感じています。そのような火災に至る危険は大きな問題です。煙報知器を設置してもらうために、主治医はこのことを自分の患者を啓蒙しなければなりません。このことについてメンツェルさん（Frau Menzel）は今回の放送において特に指摘しています。彼女は、耳鼻咽喉科クリニックの医師ですが、嗅覚および味覚障害を持つ患者のための診察を行っています。このクリニックの診察に訪れる患者の数は、コロナの流行以来増えました。

食物の摂取において臭いは重要な役割を果たします。果物が腐敗すると、これはまず臭いにより分ります。そしてその後はその外観によっても分ります。クナーデンさん（Herr Knaden）はマックス・プランク化学生態学研究所（在イエーナ）の行動生物学者（人間と動物の行動を研究する比較心理学者）であり、かつ臭いに関する研究者です。彼の研究室では果物の香りも採取されています。そこではどのような香りによってハエを誘き寄せる

か、そしてどのような香りによってハエを追い払うことができるかがテーマになっています。

大多数の人間にとっては 6 つの感覚のすべてが等しく重要というわけではありません。触覚は多くの人にとっては嗅覚よりもずっと重要です。しかしながら、嗅覚が特に重要である人々もいます。中には特にバラの香りを楽しむ人たちもいますが、彼らがコロナウイルスに感染し、そのため嗅覚が 2,3 ヶ月失われるようなことがおきると、それは彼らにとっては悲劇です。クナーデンさんとの会話の中で、それゆえにある女性が突然泣き出しました。彼女が語ったところによりますと、コロナウイルスに感染し嗅覚を失ったことにより、著しく生活の質が低下してしまったということでした。

ウルバンさん (Herr Urban) は長年、香料を扱う業界で働いていましたし、彼の妻は化学者です。夫妻はベルリンにフレグランスの製造所を保有しています。彼は、人がコロナウイルスから身を守るため、今や人間の個々人の臭いが殆どしなくなるほど頻繁に体を洗っていることに対し、残念に思います。彼は、多くの人にとってパートナーおよび他の人々を判断することがこれによってより難しくなったと思っています。彼は、誰か他の人が汗をかき、そのためその人の体臭が臭うとき、その人が突然目の前に現れたことが分るのは興味あることだと思います。

メンツェルさんは、一般的に言って、臭いは女性にとって男性にとってよりもより重要であり、そのため男性に比べより多くの女性が彼女の診察を受けに来ているという意見です。人の中には他の人に比べより繊細な嗅覚を持っている人がいます。誰かが臭いを鋭敏に嗅ぐことができるかそうでないかは実際に測定することができます。女性のほうが男性より香りをかぎ分けることが上手であることが立証されてもいます。香りにまつわる思い出についてもまた、女性のほうがより機能しているように見えます。人が誰かのことを好感が持てるか、好感が持てないかと思うのは、もちろんその人の体臭だけによるものではありませんが、大抵は無意識に過ぎないとしても、体臭もまた一定の役割を果たしています……。

さて、課題およびテキストにおいて、人口の 5% の人が全く臭いを感じず、また嗅覚に問題を抱えている人は更に多く 20% にも達することが紹介されています。これほど多くの方が臭いを感じなかったり、問題を抱えていたりするという事実には大変驚きました。5% と言えば 20 人に一人の割合ということになりますが、少なくとも私の周囲には該当者はいないようです。もっとも、私が知らないだけなのかもしれませんが、これほど多くの方が全く臭いを感じなかったり、嗅覚に問題を抱えていたりすることを知りませんでした。また、臭いを嗅いだり、味を感じたりできなくても食べることをエンジョイできるのは、口内で発達した *Feinwahrnehmung* (日本語では「精密感知」または「微細知覚」とでも表

現すべきでしょうか?)により、食べるものの組織・テクスチャーを感じるができるからとのことです。ただこれは科学的に立証可能であるとしても、私には中々具体的に実感できにくいと感じました。

ところで、ウルバンさんは、夫人とともにベルリンにおいて香水の工房および店舗を営んでいますので、同社のホームページを閲覧してみました。それによれば、同氏はオーストリア出身ですが、30年来香料の業界で活動する中で、世界中の様々な国に住んでいたWeltbürger(「コスモポリタン」)とのことです。日本の合成香料メーカーである高砂香料工業(株)のヨーロッパ現地法人にも勤務経験があるそうです(私たちの日常生活ではおなじみの合成香料ですが、最終消費者には馴染みのない香料製品ですので一般には余り知られていませんし、私自身も今までその社名さえ聞いたことがありませんでした)。その後自らUrban Scentsというブランドを立ち上げ、香水を製造・販売するだけでなく、現在はまた、コロナによる味覚・嗅覚障害に対応する嗅覚トレーニング用の香料も扱っているようです。

ところで、今回の課題および放送を聞く中で私はふたつのことを思い出しました。

一つ目は、数ヶ月前にゲーテの自習教材で読んだ「共感覚」(Synästhesie)という言葉です。改めてWikipediaで検索してみると、「共感覚とは、ある1つの刺激に対して、通常感覚だけでなく異なる種類の感覚も自動的に生じる知覚現象をいう」との説明があり、続けて「例えば、共感覚を持つ人には文字に色を感じたり、音に色を感じたり、味や匂いに、色や形を感じたりする。複数の共感覚を持つ人もいれば、1種類しか持たない人もいます。共感覚には多様なタイプがあり、これまでに150種類以上の共感覚が確認されている。共感覚を持つ人の割合については、昔は10万人に1人などと言われていたが、最新の研究では23人に1人というものもある」と解説されています。また共感覚を有する人のことは「共感覚者」(Synästhetiker)と言うそうです。今回のテーマの「香り」や「臭い」に関して言えば、ある「香り」や「臭い」を感じる時、共感覚者は「色」や「形」を感じるというのですから、私には何んとも不思議な現象に感じられます。

二つ目は、30年以上前になりますが、私がドイツの子会社で勤務した頃のことです。現在は分かりませんが、当時の私の印象では、日常生活において一般的にドイツ人のほうが日本人より香水やオードトアレを使う機会や使用量が多く、その子会社の従業員においてもそうだったと思います。平均的な嗅覚しか持っていない私でしたが、彼らの内だれかとオフィスの廊下ですれ違ったり、立話をしたりしたときには大抵その人の「香り」や「臭い」を感じたものでした。それでもその「香り」や「臭い」を持つのが誰なのかは、その人物を見ないと大抵は判別できませんでした。ただ、中には例外もありました。例えば、経営

トップ担当のある女性秘書は常に多めの香水を使っていたので、彼女が私の背後を通り過ぎただけでも分ったほどでした。

K. K.

2022年10月28日

2022年9月 Nr. 499

さて、今回は「何かを断念すること、諦めること」が話題になっています。

1年半前に出版されたヴェークストさん (Herr Wegst) の本のタイトルは „Keine Angst vorm Verzicht“ (「断念することに対する心配無用」) です。番組構成作家のアドラーさん (Frau Adler) にとっては彼女の放送において、何故断念することは常に痛みを感じるわけではないかがテーマとなっています。しかしながら、ヴェークストさんは、大抵の人にとって断念するものというのは、なしで済ませる、という見解です。非常に多くの人は 1923 年の極度のインフレーションの時には多くの事を諦めなければなりませんでした。これはドイツ人に深く根付いた共通意識の中にあります。従って、人は何かを断念するよう呼びかけられると、そのたびに、人はまたそのような大きな不足・欠乏の波がやって来ると思うといいます。

人々は、まもなく多くの事を断念しなければならなくなるのではないかと心配しています。しかしながら今既に多くの事を断念しているということについては、多くの人は気づいていません。文明 (社会) とは断念することを意味します。人は得たいと思っているものを簡単に手に入れることができませんし、稼いで得るお金で買うことができる範囲に限定しなければなりません。そして、問題を力づくで、つまり無理矢理解決しようと思うことを断念し、それを国や司法に委ねます。そして、これはたぶん殆どすべての人々も良いと思っているでしょう。なぜならば、国から安全が得られるからです。

人は毎日、常に何かを断念しています。それには慣れていきますし、そして、良く生きることが出来ます。ヴェークストさんは、人々はこの考え方を今や私たちが現在直面している問題に転用しなければならないだろうという見解です。断念をすることは彼にとって文化のテクニック、つまり、はなはだ困窮している状態で強制的に行う何物でもなく、先を見越して行動するために、習得することができる能力であり、このようにして未来を形成する道具でもあります。

実際に無くても済むものだけを諦める必要があります。人は多くの事を断念することができるといいます。しかしながら、断念することが普通になるまでは三つの段階を経なければならないといいます。第一段階では何を断念すべきかが議論されるといいます。この議論は、多くの人が不安を感じますので、非常に良くないといわれます。いくつかのことを断念することを決めた場合、切り替え段階がやってきます。そこでは人には常に何か

が不足しています。そしてその後、第三段階、つまり適応の段階がやってきます。そこでは断念したことに慣れており、断念したことを殆ど認識していません。

多くの人にとっては、この地球において際限のない成長はあり得ないということが既に分っています。従って、彼らはすでに自らいくつかは諦めています。それは「より少なく」 („Weniger“) というトレンドです。しかしながら、同時に「ますます多く」 („Immer mehr“) という潮流もあります。住民の一部にとっては、自らのために求める居住空間はますます広がっています。移民の背景を有する人々が平均で 30m² の居住面積でやりくりをしなければならないのに対し、移民の背景を有しない人々は 45 m² 以上の居住面積を使えます。そして都市においてはますます住宅事情が逼迫しています。

ラオス出身ですが、タイで生まれた、現在 45 歳になるある建築家は、断念することの中に否定的なものは全く何も見ていません。彼は自分にとって長期的に見れば生きがいに貢献しないもの、例えば甘いお菓子を食することなどは、すべて除去するようになり意識して自らの日常を形作っています。彼は、断念することは自分が本来何を、どれくらい必要としているかを自らちょっと点検する機会であると捉えていると言います。彼の生活スタイルには支出やお金を意識して取り扱うこと、および生きる喜びに対する集中が必要です。彼は支出においては必要不可欠なものに限定しますが、そうすることにより生きる喜びが少なくなってしまう場合は、決して断念しないでしょう。

彼は会社員として、かなり快適な状態で、車を使って仕事に出かけることを断念しました。寒いにもかかわらず自転車に跨がることは、短期的な視点では全く良いことではありません。しかしながら、長期的視点で見ればそれは彼にとってずっと良いことだと言います。彼はエンジニアとして雇用され、稼ぎも良かったです。しかしながら、給与が上がっても、その都度幸福感を感じることもなく、ますます支出ばかりが多くなりました。従って、今や単に惰性で行う事に対してはもはや全く支出しないように大いに努めています・・・。

さて、今回話題になっています「何かを断念すること、諦めること」というのは、一般的には否定的な意味合いまたは印象が感じられますし、否定的な文脈の中で語られることが多いと思います。しかしながら、課題や放送で紹介されている取材対象のゲストが実践している事例からは否定的な印象は受けず、むしろ肯定的な響きさえ持っています。例えば、短期的な「より快適」という視点からではなく、長期的な「健康および環境」という視点から、会社へ行くのに快適な車ではなく、敢えて自転車を使うことを選択するとか、その時の欲求を満たすという短期的な視点ではなく、長期的な視点から健康を考えた場合、甘いお菓子をたくさん食することは控えることなどはなるほどと思いました。「何かを断念すること、諦めること」を否定的ではなく、肯定的に捉えるという新しい視点を提供してく

れていると感じました。また、そのような長期的な視点からの生活スタイルを実践する人の1人としてワーグナーさんが紹介され、その彼を Frugalist と称しています。私はこの言葉を今回初めて知りました。

ところで、課題および放送においてラオス出身の建築家が登場します。彼はタイで生まれたとのことですが、私は「出身地＝生誕地」と考えていましたので、「ラオス出身ですが、タイで生まれた」という表現が不思議に感じられ、同氏の生い立ちに興味を湧きました。Beiheft に記載された Van Bo Le-Mentzel (ヴァン・ボー・レ・メンツェル) という氏名を手がかりにインターネットで検索したところ、ラオスで生活していた両親(中国人の父親とベトナム人の母親)が、ラオスの共産化に伴いタイへ避難し、その難民キャンプで1977年に生まれたということが分かりました。その2年後、1979年に両親と共にドイツに移住し、ベルリンで育ったということです。つまり、両親がラオスで生活していたことから、まだその時点では生まれていなかった彼の出身地がラオスとなったということでした。確かに生まれただけの国であるタイを彼の出身地にするのはできないかもしれませんが、とはいうものの、両親の国籍(中国人とベトナム人)を考えるとラオス出身とする以外にも個人的には少々違和感を覚えます。両親がラオス人であればこの違和感はないのですが……。今回の事例は、両親の国籍が複数存在する上に、両親の生活した土地が彼らの国籍とは異なる国という、やや特殊なケースかもしれないのですが、その息子である彼の出身地に関しては私の中ではもやもや感が残ります。では、彼の場合、どこを出身地にすればスッキリするかと言えば、残念ながら私には思いつきません。出身地を一言で表現することが難しい彼のような事例の場合、出自を説明的に伝えるしかないのかもしれない。

尚、ドイツの建築家である同氏は、Hartz-IV-Möbel(椅子、安楽椅子、ソファベッド、棚、テーブル等から構成される)や100-Euro-Wohnungなどの独創的な作品を発表してきましたことも知りました。

K. K.

2022年12月2日

2022年10月 Nr. 500

さて、今回は「ある女性の両親の介護」が話題になっています。

両親が人の助けを必要になり、その世話をする役目を担うのは、大抵の場合はその息子たちではなく、娘たちです。そのような女性の1人がゲーリッヒさん (Frau Göhlich) です。彼女たちは、両親が高齢になり、徐々にもはや自分でできなくなった場合に、その両親の世話をしたり、介護をしたりします。ゲーリッヒさんは、最初は母親が亡くなるまで介護しました。そしてそれが終わると今度は父親の番でもありました。これらはほぼ10年続きましたが、ゲーリッヒさんにはとても大きな負担がかかりました。しかしこれも今や終わりました。父親が亡くなって以後、ゲーリッヒさんは10年振りに自分自身のためにまた、時間が持てるようになりました。

両親の介護はゲーリッヒさんにはとても大きな負担となり、エステティシャンとして仕事をしている時に倒れてしまい、労働時間を減らさざるを得ませんでした。このなくなった労働時間分に対しては当然、彼女はお金を全くもらえませんでした。これによって彼女の収入は減りました。彼女の給与からはこれに応じて社会保険料の控除額も少なくなりましたが、受給できる年金保険料も少なくなりました。しかしながら、これは社会保険料で節約したものは、定年に達した際に彼女が受給できる年金が少ないということなのです。

老齢年金の算出の際には、ゲーリッヒさんが両親の介護をしていたため収入が少なかったということは確かに考慮もされますが、彼女がフルタイムで働いていたとしたら払ったであろう時よりも少ない払い込みをしていたことで失う年金の一部だけが埋め合わせをされるだけなのです。

ゲーリッヒさんは50才台半ばです。彼女は職業に就いており、結婚をしており、既に成人になった息子が1人います。彼女の母親は認知症でしたが、認知症の進行に伴いますますます要介護となりました。そして、彼女は母親を世話しました。それは彼女の就業や主婦としての仕事と並んで、ますます大きな負担となりましたが、彼女にとっては当然のことでした。

ゲーリッヒさんの母親もかつては、自分自身の両親の面倒を見なければなりませんでしたが。そのことをゲーリッヒさんはまだ子供の時に身近に経験しました。従って、母親がゲーリッヒさんに手本を示してくれたことや、それゆえに、ゲーリッヒさんにとっては自分の母

親がそのような助けを必要としている時は、その介護も引き受けることは全く普通であること話しています。彼女はこれに疑問を投げかけることはありませんでした。ゲーリッヒさんの父親は確かに、かつては女性たちが家族内の要介護者の世話をすることが普通だったとちょっと指摘していましたが、ゲーリッヒさんはその義務を負っているという気持ちはありませんでした。

弟（兄）はゲーリッヒさんと同様に子供の時、助けを必要とする高齢者を世話することがどういうことか、身近に経験しましたが、彼にはこのことは全く別のように捉えていました。彼は同じ街に住んでいますので、ゲーリッヒさんのように母親の面倒を見ることができたはずでした。しかしながら、母親のためにやったことは、ひょっとしたら経済的な面で関与することにより、いわば遠くから、距離を取って行いました。母親がまもなく亡くなるということがはっきりしてしてくると、彼は距離を置いたままで、自分に関われないと言いました。

彼の父親がますます介護が必要になったときも、弟（兄）は父をちょっと訪問しただけでしたし、介護には関わりませんでした。やるべきことはますます増えていましたが、そのようなしごとを弟（兄）は引き受けようとはしませんでした。姉（妹）が彼に助けを頼んだときも、それは彼女のほうがずっと上手にできるし、彼は彼女ほどそれをうまくはできないと言いました。時々彼はこのことをこのようにさえも表現するほどでした。父親の介護に関しては、彼女がすべてのことを仕切っているので、自分がやるべきことなど全く残っていない、と。

彼女自身、それは部分的に実際そうだったこと、また他の人が父の為に行ったことを受け入れる事が難しかったことについては認めています。父親の世話をするために介護サービスから 2 人が来た時、彼らは父親に「こんにちは」を言うことしか許されませんでした。その後は彼女は彼らを追い払ってしまいました。

彼女は、彼女の介護を助けるために誰かが来てくれればうれしいと何度も言っていますが、誰も来てくれないという見解です。それでまたもちょっとののしってしまいますが、結局従来通り続けたと言うことです。誰も来てくれないのであれば、自分がとにかく介護をやらなくてはならないと独り言を言いました・・・。

さて、ゲーリッヒさんは両親の介護で 10 年もの長い間大変な苦勞をしてきただけでなく、課題・放送で触れているように同じ街に住んでいるゲーリッヒさんの弟（兄）が殆ど協力してくれなかったことは彼女にとって非常に不運で、気の毒だったとしか思えません。また母親の死期が迫る中、その弟（兄）の取った姿勢・態度にはちょっとあきれられる思いでし

た。一方で、ゲーリッヒさんの夫については全く触れられていませんでした。これは私には不思議に思われました。親の介護の担い手の中心が娘のゲーリッヒさんにならざるを得ないとしても、夫は何らかの形で協力やアドバイスができたのではないかと、思います。彼女は「結婚している (ist verheiratet)」となっていますので、離婚や死別により、現在夫はいない状態だとは考えにくいのです。夫について一言も言及がされていないのは何故なのだろうかと思いました。更に、成人の息子についてですが、彼はおそらく親元を離れて暮していることが想像されますが、両親の介護で疲れ果てている母親に対し、息子なりに協力ができなかつたのでしょうか。こうしてゲーリッヒさんは周囲の親しい人々から孤立してしまい、長期間の介護を 1 人だけで抱え込んでしまい、仕事中に倒れてしまったり、介護サービスの恩恵を余り受けていなかったりしたことは本当に悔やまれます。もっとも、介護サービスに訪れた人に対して彼女が取った態度にも改めるべきだった点があったようにも感じますが・・・。

ところで、実は超高齢化社会である日本においても、介護に起因し家族が疲弊してしまうケースは頻りに発生しており、さらに不幸なケースでは傷害事件または殺人事件に発展することもまれではないのが、残念ながら現状となっています。また、このラジオ放送を聴いたドイツの聴取者の皆さんは、ゲーリッヒさん、彼女の弟（兄）、夫および息子に対してそれぞれどのような印象・感想を抱いたのでしょうか。私と似たような反応を示したのか、それとも全く異なる反応を示したのか、興味あるところです。

ところで、ゲーリッヒさんの職業は Kosmetikerin となっています。この言葉についてテキストでは仕事内容について具体的な記載がないように思いましたので、まずは辞書に頼りました。私の手元の 4 つの独和辞典および 1 つの独独辞典ではいずれも「美容師」または「化粧品製造工場などの実験技師」などの訳語・説明が記載されています。テキストでは彼女ががん患者と接しているとのことですので、これらの訳語・説明に違和感を覚え、上記の訳語・説明はいずれも該当しないのではないかと思います。改めてインターネットで調べて見ると、私たちが通常連想する、髪をカットし、整える「美容師」というよりは、全身美容を行う「美容師」、言い換えれば、対応する適当な日本語がないため外来語をそのまま使用しますと、「エステティシャン」が意味的には近いのではないかと思います。

K. K.